

「天使ガブリエルとマリア」(ルカ一章二六〜三八節)

1 マリア

クラントツに蝋燭が三本灯り、クリスマスがいよいよ近づいてきました。今日は待降節第三主日です。

この日私どもに示された聖書はイエスの誕生予告、そしてそれを一人のおとめが驚愕しながらも受けとめ、受け入れるところです。いわゆる受胎告知。西洋絵画が好んで描いてきた、細部はともかく、私どもも、何かしらのイメージをもって思い浮かべることのできる場面です。

ただそうしたイメージはいったん捨てていただいて、今日はルカによる福音書が語るるところにご一緒に耳を傾けたいと思います。

今日の箇所でも本来の主役はもちろんイエスです。ただ、まだ天使ガブリエルのみ告げの中に出てくるだけで、ここでのさし当たりの主役はマリアです。

キリスト教で、イエスの名前の次に、と言うべきなのでしょうけれど、もしかしたらイエスより有名な人物、その一人はマリアです。このマリアが、ここではじめて聖書に出てきます。

六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に、神から遣わされた。ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった(二六〜二七節)。

間違いなくここで焦点はマリア個人に当たっています。しかしこのイエスの母となるべきマリアについて、このとき知られているのは、ここに書いてあることでほとんど全部でした。つまり、ガリラヤの町ナザレに住んでいる、ヨセフの婚約者であるマリア、です。

何が書いてないのでしょいか。それは、今日の箇所全体を見ても、マリアとはどんな人であったかというようなこと、それは書いてありません。なるほど彼女が卑しい身分の出であったことは、今日の箇所の次の段落には書いてあります(四八節)。しかしそれだけです。

マリアは、その意味で、はじめから特別の人というわけではありませんでした。何か自分の出身を自慢できるとか、何か彼女の能力や性質がみんなに認められていたというのでなかったのです。むしろ当時の政治の、また宗教の中心、ユダヤのエルサレムからはるか遠い、「異邦人のガリラヤ」(マタイ四・一五)とすら呼ばれていた辺境に住む一人のおとめにすぎなかったのです。イエスの母になるべくしてなったというのではないのです。むしろ反対です。マリアは選ばれ用いられて、彼女において神の救いの業はひそかに始まったのです。

ただマリアがヨセフという人のいいなずけであったということ、これはマリアを知る上で重要です。

「身分の低い」（四八節）マリアをいいなづけとしていたヨセフもまた、裕福な生活をしてきた人ではありません。ただ彼は「ダビデ家のヨセフ」、つまりダビデの家系につらなる人でした。

ダビデ、ご承知のようにこの人はイエスよりも千年も前のイスラエルの王です。彼はまさに理想の王であって、イスラエルを救うためにやがて来ると人々が待望していたメシア（そのギリシア語表記が「キリスト」。救い主の意味）は、ダビデ王の再来として、少なくともその家系から出ると信じられていました。マリアはダビデの家系のヨセフに嫁ぐことによってその身分を獲得します。マリアは、神に選ばれて、神の救いのわざの中に置かれることとなります。

2 受胎告知

このマリアのもとに、天使ガブリエルが、洗礼者ヨハネの父ザカリアに現れたのと同じ天使が来て、神のお告げを伝えます。

天使は、彼女のところに来て言った。「おめでどう、恵まれた方。主があなたと共におられる」。マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人となり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない」（二八～三三節）。

天使カブリエルはマリアに「あなたは身ごもって男の子を産む」と告げます。受胎告知です。

マリアは戸惑い、考え込み、恐れます。それは当然です。いったい何がどうなっているんでしょう、と。

しかし天使はこれをあくまで恵みとして伝えていきます。「あなたは神から恵みをお願いしたのだ」。それは、「おめでどう、恵まれた方」にも表れています。「おめでどう」も恵みという言葉からできた言葉です。恵みとは「神が共におられること」です。私どもが、私どもの理解を超えた出来事に会っても、たとえそれが試練と思われることであっても、そこに「神が共におられるなら」、それを信じていることができるなら、どこまでも恵みです。

しかしマリアは戸惑い、考え込み、恐れます。それは、「あなたは身ごもって男の子を産む」との言葉を聞いて、ますます大きなものとなったと思います。そうである理由もマリアの側にはありません。

というのも、マリアはヨセフと婚約していたものの、まだ一緒には暮らしていません。だからです。当時の習慣として、婚約は手続きの上では正式な結婚と見なされていたのですが、およそ一年は、じっさいに嫁ぐことはせず、両親のもとで暮らしていたようです。マリアはその期間にあったと推測されます。そこで彼女は天使に次のように問うのです。

「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに」。天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる」(三四〜三五節)。

「どうして、そのようなことがありえましょうか」。このマリアの言葉は、私どもが前の段落で見た、洗礼者ヨハネの父ザカリアの言葉を思い起こさせます。ザカリアは妻が男の子を産むと知らされ、「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか」(一八節)と問い返しています。その結果、彼は、その不信仰を問われて、一時的であるとはいえ、口が利けなくなり、それとマリアの言葉は似ているように見えます。しかしじつは違っています。「どうして、そのようなことがありえましょうか」は、意を汲んで訳せば、「どのようにしてそれは起こることになるのでしょうか」。マリアは、疑っているのではなく、そうした驚くべきことがどのようにしてなるのか、つまりその起こり方(How)を問うているのです。

天使はこう答えます。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包むからだ」と。

「降り」、「包む」というのは、旧約の歴史を思い出させます。エジプトを脱出し荒れ野を旅していたとき、「雲」がモーセをおおったり、会見の幕屋をおおったことを思い出します。つまり、神の臨在、神の力、その働きを示す言葉です。イエスはその存在そのものを聖霊に負っているのです。使徒信条が「主は聖霊によりてやどり」と告白している通りです。

しかし私どもが注意しておくべきことは、この生まれる子が「いと高き方の子」であり、「聖なる者、神の子」であると共にイエスという名をもつということです。彼は人の子です。まことの人間です。女から生まれた方です。この世に生きる人間だれでもがもつように、名をもちます。名をもって呼ばれる人間、血肉をそなえ、悲しみにおいても喜びにおいても、嘆きにおいても、微笑みにおいても、私どもと同じ一人の人間、神の子であり人の子であるイエス、この方が、いま誕生しようとしているのです。

改めて、クリスマスとは何か、問うてよいと思います。それは神が人となって私どもとの間にお住いになったという出来事です(ヨハネ一・一四)。それは神が人を愛しておられるからです。私たちを、私を、愛しておられるからです。神と共に生きる新しい道をすべての人に開くためです。神を信じて生きる者も神の子として生きることができるようになるためです(同一・一二)。神われらと共にいます。インマヌエル、私どもはアーメンと唱えたいのです。

3 マリアの信仰

さて先ほど、ここで、つまり受胎告知を伝えるこの箇所、マリアの人格は問題になっていないと申しました。しかし天使ガブリエルとの対話の中でマリアの人となりが見えてきています。私どもも見逃すことができません。マリアの信仰です。今日の

聖書箇所範囲内でそれを考えてみたいと思います。

申し上げたように、マリアは、とくに名前を知られているわけではない、一人のご普通の女性でした。

それがここで、天使の現れに接し、夫ヨセフの子でない子を産むようになることが告げられます。彼女は戸惑い、考え込み、天使に「どうして、そのようなことがありえましょうか」と問うています。そのような彼女が、しかし最後には、こう言って天使の言葉を受け入れています。

わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように(三八節)。

マリアが、こうして神の言葉を受け入れた、それこそ信仰と呼ばれるべき事柄ですが、けれど、受け入れるに至った一つのきっかけは、その前の天使カブリエルの言葉にあったに違いありません。天使はこう言っています。

あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。神にできないことは何一つない(二六〜三七節)。

「神にはできないことは何一つない」、それを説得するのに天使は「親類のエリサベト」のことを引き合いに出しています。先週私も聞いたエリサベトです。彼女は不妊で、しかも高齢だった、にもかかわらず、男の子ヨハネを産む、マリアも親族であるなら知っていたはずですが。その事実を思い起こすように天使はマリアに語っています。

マリアは突然に受胎告知を受け、どんなに驚き、恐れたことでしょうか。信じられないこと、驚天動地のこと、しかもそれが人に知られたら、まして婚約者ヨセフに知られたら、そう考えると、み告げを受け入れることは、不可能に近いほど難しいことでした。そのようなとき、神は、いったん自分のことを考えるのを止めて、自分の外を見るように、しばしば促します。自分だけを見つめて狭くなってしまった視野を広くするようにというのです。

イエスもそのような態度を私どもに勧めたことがあります。彼は山上の説教で、人びとに、空の鳥を見よ、野の花を見よ、しかもじつと見よ、と言っています。目を転じよということです。何を食べようか、何を着ようか、自分の命のことだけ考えていては、結局思い煩うだけになってしまいます。そうならないように、外の世界を見なさい。自分の中で見失われた神も、外の至る所で恵みをもって働いている、それを見よ、考えよということです。

マリアも目を転じました。エリサベトへと目を向けました。そこで御心はなっていました。かくてマリアは不信仰へと転落しかねない自分を克服し「わたしは主のはしため、お言葉どおり、この身に成りますように」と語ることができたのです。ナザレの一人のおとめマリアは神に用いられ、用意された神の母としての道を、信仰をもって歩んでいくことになります。